

令和6年 秋季俳句講座

「私と季語(5)」

★第4回 三村 純也

『季語を詠む・季語に託す』

「二物衝撃」によつてしい新情趣を生み出すことが
作句の主流と思われる今、もう一度、「二物仕立て」
の良さを見出し、その可能性を考える。

動画配信日時 10月29日(火)10時より



三村 純也 プロフィール

1953年大阪市に生れる。中学生の頃より作句。

高校卒業と同時に「山茶花」に入会。下村非文に師事。

その紹介により清崎敏郎、稲畑汀子の指導を併せて

受ける。1997年「山茶花」を44歳にて継承主宰。

句集に『Rugby』『蜃気楼』『常行』（第26回俳人

協会新人賞受賞）『観自在』（一ははじめ）』（第34回詩

歌文学館賞受賞）など。著書に『折口信夫事典』『芸文

伝承研究』『大阪の俳人たち 4』（共著）など。

①季語と季題

ともに明治以降の語

私見 季語 一句の中で特定の季節を示す語

扱いとしてはやや軽い

拘束力が弱い

作者の言いたいこと(主題)が先にあって、

それを詠むために置く季の詞

季題 一句の中で特定の季節を示す語

一句の主題となる

扱いとしては重い

拘束力が強い

作者の詠みたいこと自体が季の詞

意味と情感↓本意・本情を重んじる

季題趣味 高浜虚子 定型と季題を入れる

拘束の上に俳句は成立

河東碧梧桐・荻原井泉水 季題

の絶対化による制約・

発想の類型化を危惧

↓季題無用論

② 一句一章と二句一章

切れのあるなし

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり

飯田 蛇笏 切れなし 一句一章

芋の露連山影を正しうす

同 切れあり 二句一章

一句一章と一物仕立て 二句一章と取り合わせ
切れと素材の混同

③ 作品から

えごの花誰もみぬとき怒りけり 田中 裕明

やはらかく水暮れてゆくえごの花 三村 純也

遠山に日の当りたる枯野かな 高浜 虚子

葛城の神鬘はせ青き踏む 同

咲き満ちてこぼるる花もなかりけり 同

白牡丹といふといへども紅ほのか

同

大空に伸び傾ける冬木かな

同

冬帝先づ日をなげかけて駒ヶ嶽

同

地球一万余回転冬日にここにこ

同

蜘蛛に生れ網をかけねばならぬかな

同

敵といふもの今は無し秋の月

同

海女とても陸こそよけれ桃の花

同

この池の生々流転蝌蚪の紐

同

爛々と昼の星見え菌生え

同

神にませばまこと美はし那智の滝

高浜 虚子

滝の上に水現れて落ちにけり

後藤 夜半

滝落ちて群青世界とゞろけり

水原秋桜子

滝落としたり落としたり落としたり

清崎 敏郎

金魚大鱗夕焼の空の如きあり

松本たかし

冬山の倒れかかるを支へ行く

同

海中に都ありとぞ鯖火燃ゆ

同

桃色に洗ひ上げたる蓮根かな

下村 非文

山又山山桜又山桜

阿波野青畝

人はみななにかにはげみ初桜

深見けん二

見ゆるもの見えて来しもの初明り

三村 純也

眉の根に泥乾きあるラガーかな

同

卒業式済みし頬杖教師われ

同

かげろふのけふのことさへとほくなる

同

蜃気楼将棋倒しに消えにけり

同

不細工な殻を選びしがうなかな

同

てつちりやけろりと嘘をつく人と

同